

平成21年10月7日

2009インターバイク・ラスベガス

米国最大の自転車展示会であるインターバイク・ラスベガスが今年も開催された。米国経済は金融危機以降大きく落ち込んでいると言われており、このことが同国の自転車市場にも大きな影響を与えている。このため今回の展示会は低調に終わるのではないかという危惧が米国自転車業界の中にはあったようであるが、結果的に昨年と同規模の入場者を集めることができ、展示会としては無事終えることができたといえよう。展示品もこれまでどおり高級自転車が数多く見られた。交通手段として用いられる車種や電動自転車の出展がもっと増えるかと思われたが、昨年と比べ大きく増えたようには見えず、新たな動きは特に感じられなかった。米国市場は基本的にレジャー目的での自転車利用が主体であることを改めて認識させられた展示会であった。

展示会の概要

展示会の名称：インターバイク国際自転車展（interbike INTERNATIONAL BICYCLE EXPO）

会 期：平成21年9月23日～25日（他にアウトドアデモと呼ばれる屋外新モデル試乗会が9月21日・22日に実施された）

会 場：米国ネバダ州ラスベガス市 サンズ・エキスポ・アンド・コンベンションセンター

主催者名：VNUイクスポジションズ

入場者数：22,500人強（昨年：23,000人強）、来場小売店数4,000店強、来場バイヤー数11,300名、海外バイヤー数は64カ国から1,300名以上

出展社数：1,100社以上（展示会事務局発表による）

アウトドアデモ出展社数：119社（現場で配布された出展社リストによる、昨年は122社）

アウトドアデモ来場者数：初日の来場者数は昨年比8%増

1. 昨年とほぼ同規模だった展示会

米国経済は厳しい状況が続いており、このことが同国の自転車市場にも大きな影響を与えている。今年に入り輸入台数が減少し、在庫も大幅に増えていると言われている。このようなことから、事前の予測では今回のインターバイク展はあまり良くないのではないか、ということが危惧されていた。ある展示会事務局幹部は、対前年比5%程度来

場者数が減少するのではないかと述べていたと伝えられており、多くの出展企業も同様の見方であった。展示面積は実際に昨年比 5~6%減少している。しかし展示会が始まってみると、このような不安は杞憂に終わり、前年並みの来場者数を集め、商談も昨年と同様か、場合によっては昨年を上回るどころも出た模様である。米国経済は大変厳しい状態にあるなか、今回の展示会は健闘したということができよう。ある業界幹部は、他の業界では 30%減、50%減、などというのが当たり前の中で、自転車業界はそれに比べればはるかに良く、この業界に在職してきて幸運だ、という話も聞くことができた。

現場の印象では、例年なら初日の朝は人が一気に入場し会場が混雑するのに、今年はそのような現象が全く見られず、閑散とした時間が流れ非常に不安になった。それが昼前になると急速に人が増え、賑やかになった。初日終了後にホテルにチェックインしている自転車関係者を多く見たが、前泊を取りやめた来場者もいたようである。

2. 展示車種等について

各社の出展状況は、従来同様の大変華やかな内容で、完成車の展示主要車種は、高級ロードレーサーと前後サスペンション付きマウンテンバイクであった。米国の主要ブランドは引き続きこれらの車種に力を入れていることが明白である。これに加え、ハイブリッド、通勤用などと呼ばれる車種が展示されていた。自転車を通勤や日常生活に使うことが、米国でも広がりつつあるとは言われているものの、これらの目的に使用される自転車は従来から存在するこれらのタイプのもので、一部の企業が数年前に提案した通勤に特化したモデルは影を潜めている。また、電動自転車ももっと展示が増えるかと思われたが、昨年に比べ大幅に増えたということはない。ある電動自転車出展企業に話を聞いたところ、欧州では電動自転車に火が付いているが、米国はそれとは様子が異なる、ということであった。

米国人の環境意識の高まりから、自転車を日常生活に使用することが一般化し、これに伴い米国自転車市場も変化するのではないかと一部では考えられていたが、今回の展示会からは、むしろ従来からのレクリエーション主体の米国市場の特徴の根深さが感じられた。長年にわたり築きあげられたその国の市場というものは簡単には変わらないのであろうか。或いは景気の悪化が市場の変化を減速させているのかもしれない。

ウェアやアクセサリー類も従来通り数多く出展されており、これらも自転車をレクリエーションに使用するからこそ、需要が存在するのであろう。また、BMX 専門の出展企業やビーチクルーザー専門の企業などは、製品の特徴がはっきりしており、却って高い存在感が感じられた。

なお、米国のある有名な出展企業は、入場パスの種類により自社の小間への入場を制限し、出展者パスでは入場を認めないというようなことを行っていた。模倣を恐れ、企業秘密を漏洩させないことが目的なのであろうが、展示会に参加したからには展示会への入場が認められた者には入場を全て認めるのが筋であり、来場者を選別したいのである。

れば独自の商談会を開催すべきであると思われる。

3. 各国の共同出展等について

今年もイタリアが、イタリア貿易委員会の絶大な支援のもと大きな共同小間を確保し、大規模な出展を行っていた。洗練された共通の小間装飾が行われており、例年通りセンスの良さが感じられた。このほか台湾と中国が共同出展を行っていた。これらはどこも30社前後の参加企業があり、多くの来場者から注目されている。このほか今年も、新規出展企業コーナーとヨーロッパ村、それにBMXゾーンが設けられていた。

4. 展示会の位置付けの変化

米国国内での自転車製造が激減したことから、部品メーカーにとっては、米国で出展する意味が薄れてきているという話を複数の業界関係者から聞いた。完成車メーカーが米国国内になれば、部品メーカーにとって出展する意義は薄れるのは確かかもしれない。

またマウンテンバイク以来新しいものが米国では出て来ていないことに比べ、欧州では電動自転車をはじめ市場に変化が起きており、ここに欧州と米国の差があるとの指摘もあった。

このようなことからであろうが、南米のバイヤーはインターバイクには来なくなり、ユーロバイクに出かける人が増えているという話もあった。このため国際展とは言いながら米国のローカル展示会のような感じになっているという話も耳にした。但し展示会事務局によると、カナダ、メキシコ、中国、オーストラリア、及び中南米からの業者が来場者数の底上げに貢献しているとしている。

一方、実際の自転車の仕様は12月に台湾で開催される台中自転車ウィークで決定されるため、自転車業界の間ではこの台中自転車ウィークの存在感が高まっており、この点からも展示会は多少影響を受けているということと言えると思われる。

米国は最大規模の市場を持っており、その米国で唯一かつ最大の展示会であるので、引き続き多くの商談の機会を与えていることは間違いない。但し今回の展示会が思ったより盛況であったからといって、そのことが実際の米国の自転車市場の活性化につながっていくのかどうか、注視していく必要はある。

5. アウトドアデモについて

展示会に先立ち、21日・22日の2日間、屋外で新モデルに試乗できるアウトドアデモが行われた。アウトドアデモ会場は、従来と同様ボールダーというところで、ラスベガス市内からバスで30分ほど行った、砂漠の岩山の中である。数多くの小売店や出展企業の若者が試乗に訪れていた。当日現地で配布された出展企業リストによると、出展企業数は昨年とほぼ同じ119社であった。展示会本体には参加せず、このアウトドア

デモだけに参加する大手企業もある。小売店の人たちにとっては、最新モデルへの試乗の機会であり、自分の店でこれから取り扱う自転車を見定める重要なイベントとなっている。

但し砂漠の岩山の中のダートロードを走ることが主となる試乗会なので、高性能マウンテンバイクを試すのには最高であるが、それ以外の車種については、別の場所が設けられてはいるものの、継子扱いの感は否めない。ハイブリッドや通勤車の試乗には不向きで、ましてやロードレーサーの試乗は難しいというのが実際の印象ではないだろうか。現在の米国市場の構造を考え合わせると、マウンテンバイク以外の車種にも対応できる試乗の機会を設けられれば、更に充実したアウトドアデモになっていくと感じられる。





6. その他の関連イベント

今年も展示会に併せてサイクリング大会が開催された。アウトドアデモ初日の22日早朝に会場周辺を走るツール・ド・レイクメドウと呼ばれる自転車ツアーが開催され、400名ほどの参加者を集め、イベント全体を盛り上げた。

このほか米国自転車小売協会（NBDA）は、22日から25日にかけて展示会会場の会議室を用い、小売店向けセミナーを開催した。内容は販売促進、顧客サービス向上、米国自転車市場の現状等に関するもので、盛り沢山の内容のものであった。

7. 来年のインターバイク展について

今回、展示会事務局からは来年のスケジュールが早くから発表され、従来より1週間遅い日程で開催されるとされていたが、展示会終了後急遽変更され、従来通りのスケジュールで開催されることとなった。9月22日から24日にインターバイク展、それに先立つ9月20日、21日にアウトドアデモが開催される予定である。展示会場での案内やイベントガイドには1週間遅い日程が示されており、また先のレポートを執筆する際に主催者に念のため確認した際にも、この遅い日程で開催すると言っていたので、主催者内部でも誤解があるものと思われる。今後内外に混乱が生じる可能性があるので注意が必要である。また今後も念のため日程に変更が生じないか注視していく必要もあると思われる。

以 上

（国際業務部）



この報告書は、競輪の補助金を受けて作成したものです。